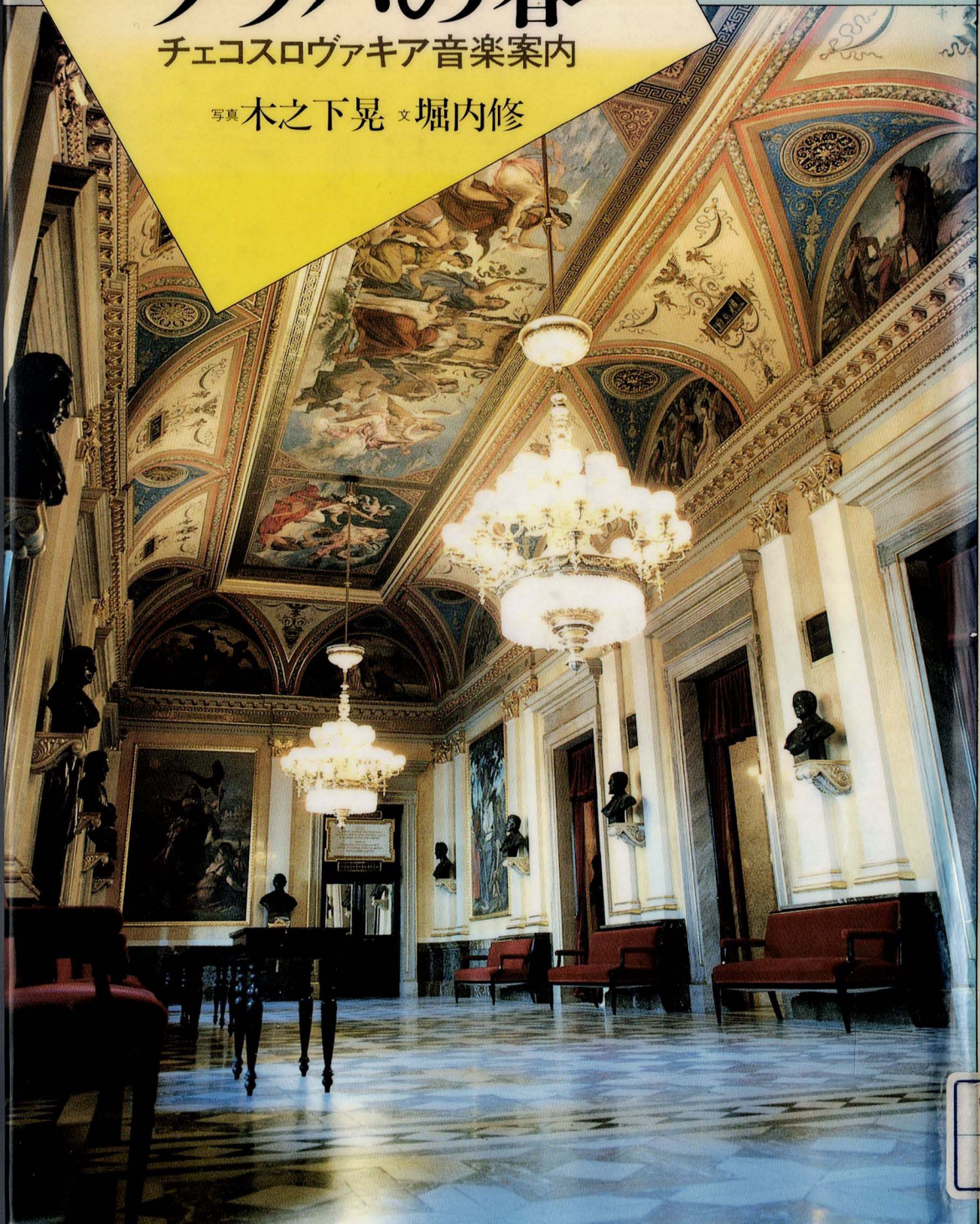


プラハの春

チェコスロヴァキア音楽案内

写真 木之下晃 文 堀内修

music gallery



music gallery

プラハの春

チェコスロヴァキア音楽案内

写真 木之下晃 文 堀内修

音楽之友社





プラハ革命 80万人集会

89.12.26. プラハ・レトナ広場

小雪が舞うプラハのレトナ広場は寒かった。広場は地平まで見渡す限り人・人・人。私はこれ程の大群衆を見たのは初めて。人口120万のプラハの人のほとんどがここに集まっている。足元から深く冷えこむ寒さに人々は自然と飛び上る。それが人波となつて、

まるで海岸に打寄せる波の如くうねる。この集会には当時のアダメツツ首相から亡命歌手のフトカまでが同じ演台に立った。80万人の沈黙した冷たい視線は現政権の背筋を射抜き時代を完全に否定していた。

プラハ革命 ゼネスト

1989. 12. 27. プラハ・
ヴァーツラフ広場

歴史が転換するその現場を見た。正午、プラハ市民はゼネストに突入した。教会の鐘が鳴り、サイレンがうなった。50万人の市民で埋まったヴァーツラフ広場はチェコの国旗が揺れ、人々のシュプレヒコールが寒い冬の地底からまるで厚い凍った地表を押し破って、

春を告げる如く、怒涛のような唸り声をあげて立ち登ってきた。1968年8月20日深夜、チェコ民衆の「民主主義の導入」要求を、ソ連がチェコ侵入によって押しつぶした。当時戦車が占領した同じ広場で、民衆は全くの無手で、「自由」を勝ち得た。



▶ゼネストには音楽家も数多く参加。音楽院の教師たちも街角で歌による祈りを捧げた。



▶ヴァイオリニストのヴァーツラフ・フデチェク夫妻もゼネストに参加していた。



ナチスドイツの革命の一端となったのはベルリンの壁の崩壊を受けて、八九年一月一七日「自由」を求めて行った学生デモを機動隊が弾圧したことによる。学生虐殺に市民の怒りが爆発。一月二四日ヴァーツラフ広場に五〇万人の市民が集まって抗議集会を開いた。その時に二年前、ソ連によって追放されたドブチェク（元共産党第一書記・現連邦議会議長）が初めて市民の前に姿を見せた。一月二六日レトナ広場での八〇万人集会。一月二七日ゼネストに突入。一月二八日市民フォーラムによる新政権の誕生と、革命は電光石火の勢いでたった三週間で終結した。この革命は実に静かに非暴力的に、整然と平和的に行なわれた「柔らかな革命」であった。それ故「ビロード革命」と呼ばれている。そして、この革命を裏で支えたのが学生フォーラムで、その学生と連帯したのが音楽家など「芸術家による革命」でもあった。集会やデモの政治演説の間に、ロックやフォークの人気歌手が歌い、彼らのリードで民衆が合唱した。それは警棒に対抗した無手による「歌う革命」であった。（K）



▲89年11月17日国民通りをデモ行進中の学生を機動隊がカニユカの家（ペートーヴェンのパトロン弁護士ヤン・カニユカ・ジュニアの家）のアーケードに封じ込んで虐殺した。道端には市民の祈りをこめたローソクが灯されていた。



▲国旗をマントに。チェコでは国旗が自由と民主化のシンボルである。



▲ストライキは11月22日から12月10日まで続いた。プラハの街中の建物にビラが所狭しと貼られ、市民の情報源となっていた。



▲“百塔の街”プラハは中欧最古の街の一つ。街は中世の趣きをそのまま伝え、街全体が歴史的建築物の博物館といえる。この写真は15世紀に作られた旧市庁舎の天文時計塔上からみた旧市街広場である。ゴシック様式の二つの尖塔はティン教会(1365年建)。正面に見えるロココ様式の建物(1755～65年建)がゴルツ＝キンスキー伯爵宮殿(現：プラハ国立美術館)。



▲外務省(チェルニーン宮殿)の向い下にあるバロック様式のロレッタ教会では1時間おきに「マリアの歌」を1694年に鑄造された27個のカリヨンが奏でる。



▲映画「アマデウス」はプラハでロケした。正面の2階家が、その時のモーツァルトの「アマデウス」の家。その横の3階家は画家のムーハ(ミューシャ)の家である。



▲フラツチャニ城内にある聖ウイート大聖堂。最初のオルガンは1277年に設置。1848年に3台のオルガンが備えられた。



▲フラツチャニ城内にあるロマネスク様式の聖イジー教会。音響効果がよく「プラハの春」音楽祭のコンサート会場にもなる。復活祭の中世礼劇に最適の場所。



▼ブラハの天文時計。旧市庁舎隣りにある。毎時00分にはキリスト12使徒の人形が死神の鳴らす鐘の音とともに順繰りに姿を見せる。



▲フラツチャニの丘、ストラホフから眺めたブラハ市街の眺望。真ん中を流れるのがモルダウ即ちブルタヴァ川である。



▲交響詩「わが祖国」に登場するウイシェフラット城跡は現在文化人墓地。ムーハ、ヤン・クーベリック、カフカなどが葬られている。

▲フラツチャニ城。正面のゴシック建築が聖ヴィート教会である。926年に最初の円形教会が建てられ、カルル4世時代（1344年）に現在の形が出来上り、完成したのは1929年である。外郭の建物は大統領府（旧王宮）。



▲旧市街広場の近くに作家カフカの生家がある。隣りは聖ニコラス（ミクラーシュ）教会。



▲ブルタヴァ川(モルダウ)とフラッチャニ城(ブラハ城)の夜景。美しく実にロマンチックな風景。



▲ブルタヴァ川と正面がフラッチャニ城。石橋がカレル橋。右岸の柳が見える建物がスメタナ博物館。

▶旧市街広場には神学者ヤン・フスの像が立つ。台座には「真実を愛し、真実を語り、真実を守れ」と刻まれている。革命の前年、その像の前で若者は「自由を」と歌っていた。(89・5・22)



◀新生チエコスロヴァキアの連邦議会議員を選ぶ初の自由総選挙が90年6月8、9日に行なわれた。市民フォーラムのユニークな選挙運動が目をついた。(ヴァーツラフ広場、90・5・26)

▶フラッチャニの王宮の北側に16世紀そのまゝの黄金小路がある。この22番地の小さな家をカフカは半年ほど(1916年11月~1917年5月)仕事場にしていた。カフカは毎夜遅くまで執筆し夜は旧市街ランゲ通り18番地の下宿に帰って寝た。



◀市民フォーラムは選挙運動で徹底した共産党糾弾キャンペーンを展開した。(堀の上通り、90・5・26)

プラハの春'89

◀ 30年戦争の英雄ワルツシュタイン伯が17世紀初頭に建てた華麗な宮殿。騎士の間での堀米ゆず子と渡辺康雄の演奏会。音響の素晴らしい豪華な宮殿広間で2人の意気が合った熱演は、大きな拍手を呼んだ。(89・5・19)



▲マウリッツオ・ボリーニはプラハでも大人気。ドヴォルジャーク・ホールはステージ上にまで聴衆が溢れていた。(89・5・24)



▶ 文化宮殿はプラハの街はすれ、超高層ホテル「フォーラム」の向いにある。共産党の党大会などを開くために作られた近代的大ホール。日本にも馴染み深いズデニェク・コシユラーがスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団を率いてきた。(89・5・20)

►ルジェロ・ライモンディの人気も衰えた。ドヴォルジャーク・ホールは通路も人で一杯。足の踏み場もなかった。アンコールで歌った「ドン・ジョヴァンニ」からのアリアに聴衆は総立ちになって拍手を送った。(89・5・21)



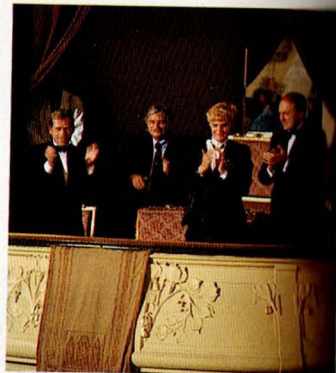
▲ヴァツラフ・ノイマン指揮のチェコ・フィルは人気チェリストのヨーヨー・マを招きドヴォルジャークの「チェロ協奏曲」を典型的なアールヌーヴォー様式の世紀末建築で有名なスメタナ・ホールに響かせた。プラハで聴く、このコンビでのドヴォルジャークは最高であった！(89・5・24)



◀1945年に結成され、日本でも絶大な人気を誇っていたスメタナ弦楽四重奏団の引退公演がこの年のハイライトだった。中世美術のコレクションが展示されている美術館の中にあるマリーネス・ホールでの最後の演奏にハイドン、スメタナ、ドヴォルジャークを聴かせて、聴衆の熱い拍手の中、花道を引きあげて行った。(89・5・25)

「プラハの春」は一九六八年のほんの短い期間、チェコスロヴァキアに実現した比較的自由な政治体制をいう。しかしこれは同年八月二〇日のソ連軍を主力としたワルシャワ条約機構軍の軍事介入によって、無惨に踏み躪られた。しかし、もともとは第二次大戦直後の一九四六年からプラハで開かれていた国際音楽祭の名称である。

「プラハの春」国際音楽祭は、オーストリアの支配に抵抗した作曲家スメタナを記念して、毎年、彼の誕生日の五月二二日、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団が演奏するスメタナの交響詩「わが祖国」で開幕。六月二日ベートーヴェンの交響曲第九番で幕を閉じる。(K)



▶スメタナ・ホール貴賓席のハベル大統領とチャルファ首相夫妻。(90・6・2)

▼レナード・バーンスタインの第九は第4楽章で“自由”を歌った。歓喜 Freunde を自由 Freiheit とバリトンと合唱が感動的に歌いあげた。



「プラハの春」は、空は青く澄み、木々の緑は鮮やか、この街の代表的な並木であるアカートの白い花が肩に降りそそぐ。すばらしい季節だ。政治体制がどのように変わろうとも、モルダウは静かに流れ続ける。

国際音楽祭は体制変化によって様変わりした。チェコから亡命したラファエル・クーベリックとルドルフ・フィルクスニーが帰って来た。クーベリックは四八年、チェコに共産党政権が生まれると海外へ亡命。フィルクスニーはそれ以前、第二次大戦中、ナチスの故国進政後ヨーロッパに脱出、戦後アメリカへ亡命した。この二人は第一回の「プラハの春」に出演して以来四四年ぶりの里帰りだった。そして第二回の音楽祭には、アメリカで華麗にデビューしたばかりの当時二八歳のバーンスタインが出演。彼もその後、この音楽祭に姿を見せることはなかった。

クーベリックは五月一二日の開幕でスメタナの「わが祖国」を振り、バーンスタインは六月二日ベートーヴェンの第九を振った。そしてフィルクスニーは九〇年がマ

ルティヌーの生誕一〇〇周年ということもあって、彼のピアノ協奏曲を演奏した。いずれもチェコ・フィルとの協演だった。ハベル大統領はこれらの演奏会にはいずれも顔を見せていた。

バーンスタインの人気はもの凄く、切符を手になかったプラハ市民のために、リハーサルを公開し、六月三日に追加公演をするほどだった。公開リハーサルの時、バーンスタインは市民フォーラム「OBČANSKÉ FORUM „GLOF”」のバッチをつけていた。ちょうど革命後の初の自由選挙を一週間後に控え、「プラハの春」も選挙を意識した音楽祭にならざるを得ず、本番の演奏会でもチェコ・フィルと合唱団のメンバーの多くが同じバッジを胸につけていた。

昨年の一二月、革命の際にノイマンとチェコ・フィルは音楽家の先頭に立ってストライキを打ったのである。音楽と音楽家はチェコの民主化の中で、一貫して重要な役割を果たしてきたことを明記しておきたい。(K)



▲ラファエル・クーベリックは34年チェコ・フィルを指揮してデビュー。36～39年は常任指揮者、42～48年では首席指揮者だった。77歳、既に現役を引退。その演奏は心の琴線にふれる名演だった。(写真提供：日本コロムビア)



▲ルドルフ・フィルクスニーはモラヴィア出身。79歳。ナチに抵抗して故国を去った、巨匠の帰国は自由の到来の象徴であった。オーケストラは敬意を持って、拍手で彼の里帰りを歓迎した。



◀ニキタ・マカロフはソ連ペテルスブルク生。79歳。現在、スイスに住み、現役で大活躍。力強いタッチと明快な表現力はロシアの伝統を今日に伝える貴重な一人。

プラハ素描

堀内 修

城

巨大な城だろうか？

ブルノからボヘミアの野を抜けてプラハに向かう高速道路を走り、そろそろ街が見え始めるはずだと思ったころ、夕空の底に、黒々とした胸壁が見えてきた。低い丘を越え、下り坂にかかったとき、彼方は胸壁の列で覆われていた。

プラハは巨大な黒い城である。だが、近づくにつれ、城は分解していった。城の胸壁と見えたのは、実はアパートの四角い建物の連なりだったのだ。

プラハは幻の城壁に護られている。た。

そういえばハプスブルクのルドルフ二世はここを拠点にしていたのだった。ルドルフ二世は宮廷楽団を充実させ、フィリップ・ド・モンテラネーデルランド楽派の音

楽家たちを大勢招いた。皇帝は音楽だけでなく、芸術や工芸品や珍奇なものコレクションでもあった。かのアルチンボルトも皇帝に仕えた画家だった。いまはウィーン的美術史美術館にあるいくつかのだまし絵も、かつてはプラハの宮殿を飾っていたのである。

ネーデルランド楽派のポリフォニーとアルチンボルトのだまし絵の錯覚は、近づくにつれて分解する城壁につながっていないだろうか？

プラハは実に見事なやり方で、訪れる者を迎える。

エスカレーター

街で一番気に入った場所がある。ここにもやはり錯覚がからんでくる。

それは地下鉄の駅にある。ムステク駅の、ホームへ向かうエスカ





▲ドヴォルジャーク・ジットナーの家

1904年5月1日ドヴォルジャークはここで腎臓病のため急逝した。このジットナーの家はプラハで5度目の家であった。2間つづきのアパートで、大勢の家族と共に27年間住んだ。この家は現在、個人の住宅であるため、訪問は不可である。

▶チャイコフスキーは1888年にここを訪れ、90年にはドヴォルジャークがロシアを訪問するなど親交を結んだ。



▲1880年にチャイコフスキーが訪問した碑刻。



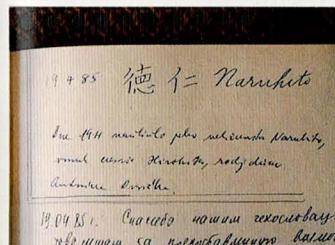
▲ドヴォルジャークの胸像。窓は彼が住んでいた部屋。



頃、皇太子徳仁殿下は浩宮様がある。ここを訪問されたことがある。

▲アントニン・ドヴォルジャークの生家

プラハの近郊、ネラホゼヴェスの宿屋と肉屋の長男として生まれた。下に7人の弟と妹がいた。母は土地の領主ロブコヴィツ公の執事の娘だった。この生家の庭から直接領主の城が見える。玄関前の道を隔てた所がネラホゼヴェス駅で、彼の汽車好きは幼児の頃のこの環境に影響されている。



▲ネラホゼヴェス駅。ドヴォルジャークは大変な鉄道マニアでもあった。

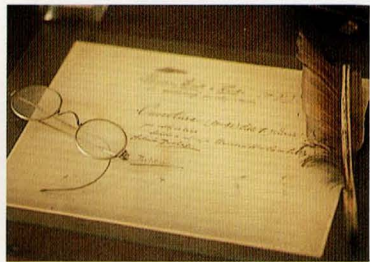


▲生家は博物館として一般に公開。家具、調度品が往時のままだ。



▲ドヴォルジャーク記念館

1712～20年にかけて、ミフナのヤン・ヴァーツラフ伯爵のためにフランス風に建てられた夏の別荘。その後、多くの人の手を経て、居酒屋になったり、ついにはプラハの貧窮院であったが、1932年6月からドヴォルジャーク記念館となった。



▲ドヴォルジャーク愛用の羽根ペンと眼鏡。



▲この別荘は建築当時から“アメリカ”という名で呼ばれていた。ドヴォルジャーク生誕120年祭を祝って、記念品を整備し1961年に国立の記念館として開館した。

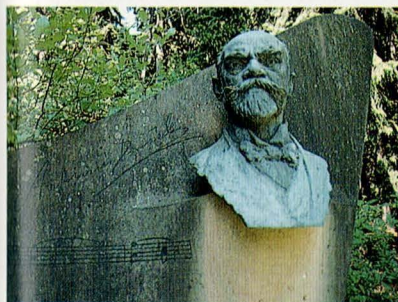


▲ヴィラ・ルサルカ館(カワニッチ伯爵邸)

オペラ「ルサルカ」はこのカワニッチ伯爵邸の奥庭にある幻想的な森の池がテーマ。ドヴォルジャークはピアノの弟子で金細工師チェルマークの娘ヨセフィーナに恋心を抱いていたが、彼女はカワニッチ伯と結婚し、傷心のドヴォルジャークが書いたのが18の歌曲集「いとすぎ」である。後にドヴォルジャークはヨセフィーナの妹アンナ・チェルマーコヴァと結婚した。



▼ヴィラ・ルサルカ館
現在はドヴォルジャーク博物館として一般公開されている。



▼ヴィラ・ルサルカ館
玄関庭にあるドヴォルジャーク胸像。



▲ヴィソカーのドヴォルジャーク別荘

1885年春、ヴィソカー村に地所を買って別荘を作り、夏はもっぱらそこで作曲した。看板の背後に見えるのがその別荘で、現在も縁者が住んでいる。

▶聖イグナチオ教会

1665〜70年に建てられた。正面に後光のさす有名な聖イグナチオの像がある。ドヴォルジャークはジツナーの家から毎日の教会を訪れた。ドヴォルジャークの葬列は聖サルヴァール教会から国民劇場を通り、聖イグナチオ教会を経て、ヴィシエフラット墓地へと進んだ。



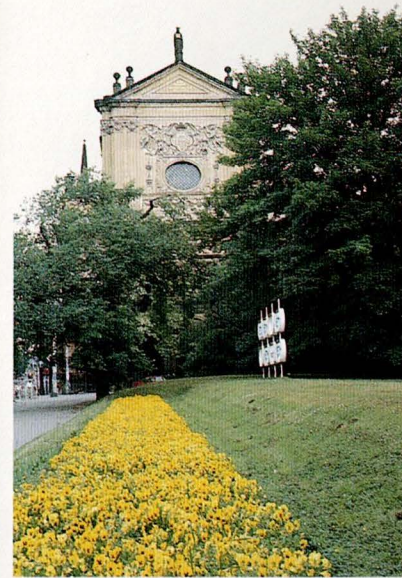
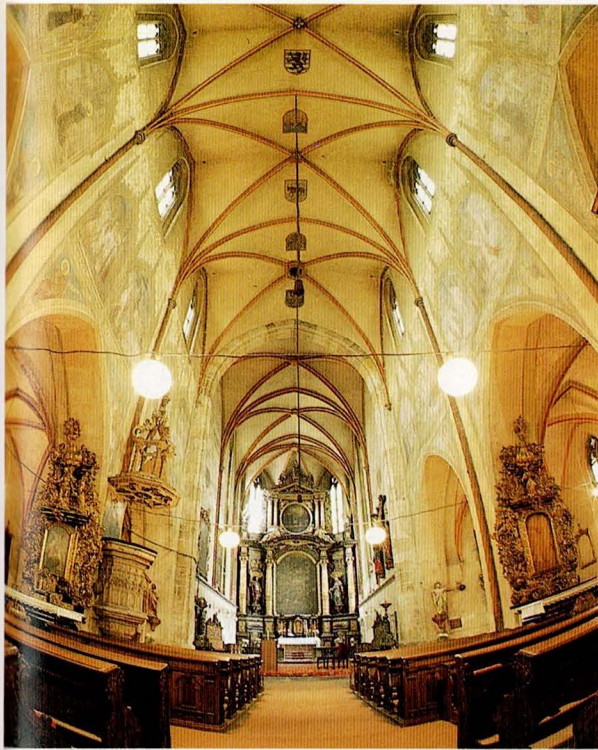
▲聖サルヴァール教会
1578〜81年にかけてイエズス会がクレメンティヌムの寄宿舎の付属として建てた。1904年5月4日ドヴォルジャークの葬儀が行なわれた。



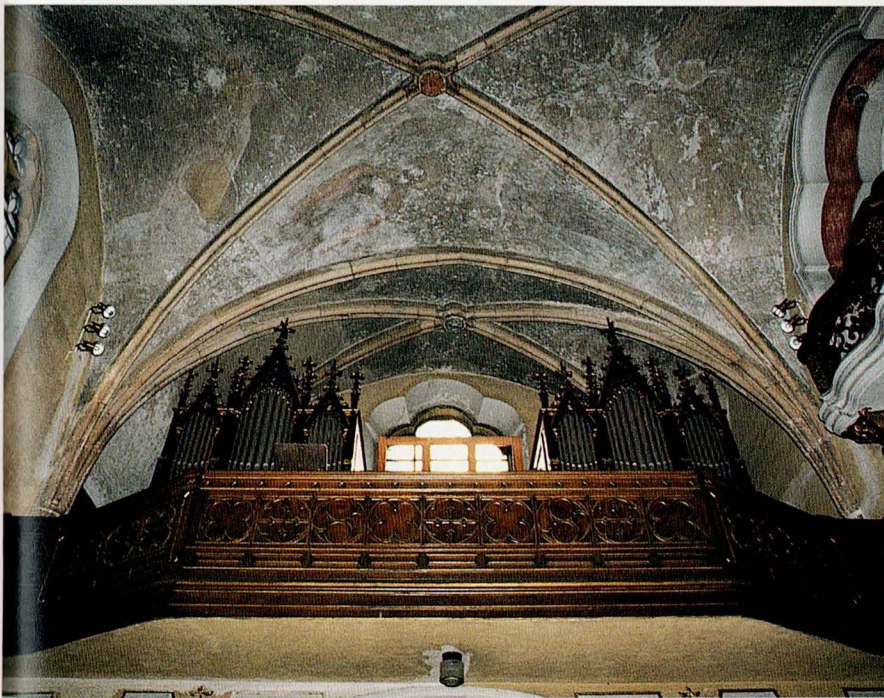
▶ヴィシエフラット城跡にチエコを代表する文化人が眠る墓地がある。その一画にドヴォルジャークも眠る。

▼聖ステファン教会

ドヴォルジャークの娘オティリエがヨーゼフ・スークと1898年11月17日にこの教会で結婚式をあげた。立会人はドヴォルジャークの義兄のカワニツチ伯であった。またこの日はドヴォルジャーク夫妻の銀婚式でもあった。



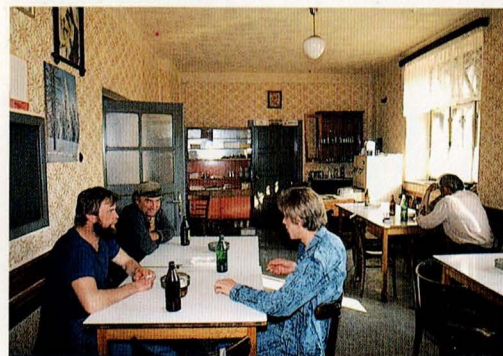
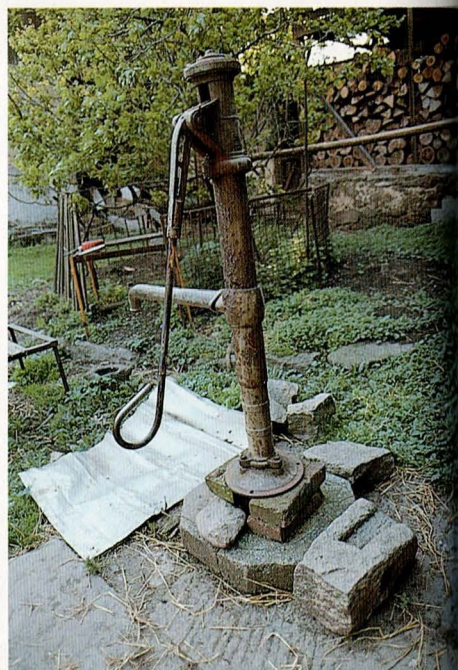
▲聖ウオイチェフ(アタルベルト)教会
1700年に建立。ドヴォルジャークは新婚早々の1874〜78年この教会のオルガニストとして奉職した。彼はその給料と個人教授の収入だけで生活し、作曲に専念した。



▲聖ウオイチェフ教会のオルガン
このオルガンはドヴォルジャークの後をヨゼフ・ボフスラフが継いだ。彼はこの教会の官舎で育った。

▼マーラーは1869年にイグナウのギムナジウムに入った。71~72年の1年間ブラハのギムナジウムに転校したが、父に連れられて帰郷。再びイグナウに戻り75年までいた。そしてウィーンに出たのである。

▶中庭に残る昔の井戸。



▲▶この家は現在も居酒屋として土地っ子のたまり場になっている。マーラーの使用人の孫である老婆が一人でこの店を開いている。彼女はマーラー・ファンでマーラーの資料をダンボール箱一杯につめ込んで持っている。



▲マーラー生家の中庭

中庭は馬車屋当時の馬小屋も残り、便所も全くその当時のままの旧式。ちょっと使い難い田舎スタイル。

▲グスタフ・マーラーの生家
マーラーはウィーンとブラハの中間にあたるモラヴィア平原の小村、カリシュトに1860年7月7日に生まれた。父はゲルマン系のユダヤ人で馬車屋の馭者をしたり、ブランドーの醸造をしたり、小さな旅籠をしたりしていた。その生家は今も残り、往時のままの面影の居酒屋である。マーラーには12人（15人説）、8人は早世の兄弟がいて、彼は2番目、幼少から音楽の才能を見せ、父はマーラーの才能を伸ばすため、この家を使用人に譲って生まれた年の12月には近くの都市イグナウ市に移った。マーラーは2歳ですでに数百の民謡や近くに駐屯していたオーストリア軍の軍歌を覚えたという。

ヤナーチェク

ヤナーチェクは1854年7月3日にチェコスロヴァキア中部モラヴィア地方の北、ポーランドとの国境に近い町オストラヴァ（ここで亡くなった）から南へ25キロほど行った小村フクヴァルディの小学校で生まれた。父はその小学校の貧乏教師で10番目の子供だった。生家は現在も小学校として残っている。小学校を出ると父の知人を頼って、モラヴィアの首都ブルノへ行き、聖アウグスチノ会修道院付属音楽学校の給費生となった。後ブルノの師範学校へ通い、途中でブラハのオルガン学校へ留学。国家試験に合格したので母校の師範学校で音楽を教える傍、市民合唱団の指揮者として活躍。1881年にブルノ・オルガン学校を創立しその校長に就任した。

◀ブルノ・オルガン学校の裏にヤナーチェクの自宅があった。現在は記念館として一般公開されている。



▲記念館の中はヤナーチェク在世中のままに部屋が保存され、彼の作曲机などが残されている。

◀瀟洒なヤナーチェク宅の全景。右側にオルガン学校がある。



▶聖アウグスチノ会修道院教会の合唱指揮者ハヴェル・クシーシュコフスキーは父の知人で、ヤナーチェクは彼の許で指揮法と作曲法の基礎的な訓練を受けた。

▶ヤナーチェク音楽院
ヤナーチェクは1919年にブラハ音楽院ブルノ分校を創立。学校名に彼の名が残る。



▲ブルノ・オルガン学校

1881年ヤナーチェクは自身が学んだブラハ・オルガン学校になって、ブルノ・オルガン学校を創設した。

▶ヤナーチェクは64歳の時カミラ・シユテスロヴァーという既婚の若い女性と知り合い、2人は離れて住んでいたため手紙による愛の往復書簡を交わした。1827年8月12日、故郷フクヴァルディに彼女を招待。その時彼女の息子が森で迷子になったのを探し回って風邪をひき、肺炎を併発して74歳の生涯を閉じた。





▲金の一角獣スメタナの家

お伽噺の国みたいな旧市街広場と、鉄の通りとの角にある建物にスメタナは1848年8月から住んだ。カチエリナ・コラージョヴァーとの新婚生活もここで送った。プラハの旧市街の建物の番号はこの家を起点として一連の番号がついている。写真の右から3番目の4階家がスメタナの家で、左から2軒目の家にカフカやシュヴァイツァーが住んでいた。

スメタナはボヘミアのリトミシュル城付のビール醸造人を父に、城主の駈者の娘を母に1824年3月2日リトミシュルで生まれた。長男だけれど1人の姉と5人の異母姉がいた。43年にビールで有名なビルゼンのギムナジウムを卒業後、父の反対を押し切ってプラハに上京。45年からトゥーン伯家の住み込み音楽家庭教師として3年間働いて蓄財、その仕事を恋人（後の妻カチエリナ）に譲って、音楽塾を開講すると同時に演奏活動に入った。56～61年にかけてスウェーデンのイエーテボリの指揮者として活躍したが、祖国に反オーストリアの国民運動が勃興。急帰国して音楽面での先頭に立ち、新しい民族音楽を作り出す指導者として作曲、指揮、評論と幅広い活躍をした。50歳の時に聴覚を失ったが、79年不朽の名作交響詩「わが祖国」を作曲した。



▲ラジャンスキー宮殿
この建物にスメタナは1863～69年まで住んだ。現在は映画のアカデミーになっている。



▶スメタナ博物館
カレル橋のたもとから国民劇場への河岸の道をスメタナ河岸という。博物館は橋のたもとにある十字架広場から歩いてすぐの右側にある（1936年開館）ボヘミア・ルネッサンス様式で、かつて旧市街水車小屋があった所。



▲スメタナ博物館の前にあるスメタナの像。



▲ここにはスメタナの自筆草稿、書簡などスメタナに関する資料が収集されている。



▶スメタナ愛用のペン



▲スメタナ・ダリボルの塔

スメタナは国民劇場の起工式の祝典用オペラとして「ダリボル」を作曲した。これは彼の3曲目のオペラである。この塔は中世の牢獄として使われたもので、ブラハ城の北側、聖イジー教会から坂を下って行くと出会う。途中を左手に入るとそこは中世の街並を残す“黄金小路”である。



◀スメタナの墓

スメタナは83年頃から精神錯乱を起し、60歳の祝賀を受けられる状態ではなく、84年の4月にブラハの精神病院に移され、1884年5月12日永眠した。彼もヴィシエフラットの墓地に埋葬された。この名誉墓地は1870年代に枢機卿のヴァーツラフ・シュトウルツの発案によって作られたものである。

チェコスロヴァキアが生んだ五人の作曲家

堀内 修

ベドルジフ・スメタナ

「ブラハの春」の初日には、毎年必ず「わが祖国」が演奏される。「ブラハの春」は、スメタナで始まらなければならない。そもそも「ブラハの春」の初日と決められている五月十二日は、スメタナの命日なのだ。

ブラハの街にはいくつもスメタナがある。スメタナ博物館は、ブルヴァア川に面した市の中心部にある。そのすぐ前には立派なスメタナの像がある。博物館のある川沿いの通りの名もスメタナだ。コンサート・ホールはスメタナ・ホールだしオペラ・ハウスはスメタナ劇場。音楽家の大勢眠っているヴィシフラッド墓地でも、スメタナの墓はひととき立派である。世界的な大スターだったチェコのソプラノ、エマ・デステイノヴァー

(エミール・デステインの名で知られる。映画にもなった)の墓も大したものだけれど、スメタナのほうが格上だろう。

チェコで最も栄誉を受けているのは、疑いもなくスメタナである。確かにその栄誉に価する。昔から音楽が盛んで、どこにいてもヴァイオリン弾きがいるといわれるチェコだけれど、チェコ人の音楽を作り上げたのはスメタナだったのだから。

ベドルジフ・スメタナは、ボヘミアの東部にあるリトミシエルという小都市で一八二四年に生まれ、一八八四年ブラハで亡くなっている。ベドルジフはドイツ語のフリードリヒにあたり、そう呼ばれることもある。



▶スメタナの胸像(スメタナ博物館)

いまのブラハを見ると、さぞ幸福な生涯を送ったのではないかと思ってしまうが、そうでもなかった。というより、よくもこれだけ不運が重なるものだと驚くくらい。音楽好きの少年が成長し、ブラハで音楽家として生きていけるよ

うになったのは良かった。立派な師にも恵まれた。恋愛をしてその相手と結婚できたのも良かった。だが、自分に似て音楽的才能があると思われた愛する子供に死なれてしまう。

悲嘆にくれて作られたピアノ三重奏曲ト短調を、他人はありがたく受け入れるが、本人の傷はそれで癒されない。

スメタナは妻も失なう。立ち直って次の恋愛をするが、不幸を味わったことに変わりはない。

演奏家としても、多くの失敗を重ねる。肝心の作曲家としてだつて、新しいチェコの音楽に対する見解の相違から、敵ができ、ドイツ的な音楽だという非難がいつもつきまとつた。

ベートーヴェン同様、耳が聴こえなくなつた。音楽家としては悲劇的といふ言いようのない運命だ。それでも作曲を続け、傑作を書いたのだが、指揮者としての活動はできなくなり、やがて貧窮する。

作品が広く受け入れられたときは晩年だつた。ずっと前に書いたオペラ「リブシエ」の初演を、スメタナは見ることができたが聴く

が、招かれるままスウェーデンのイエーテボリに、指揮者としておもむいたのは、革命失敗後、オーストリアの弾圧が強まっていた、プラハの居心地が良くなかつたからでありそうだ。

スメタナがイエーテボリに滞在していたのは、およそ五年間。ずっといたわけではなく、プラハに帰つたりもしている。この間妻を失ない、二度目の結婚をした。

スメタナが離れているあいだに、プラハは大きく変つた。オーストリアの反動的な支配が緩み、チェコ人の文化が台頭してきていた。やがてチェコ語の新聞が発行され、チェコ人の国民劇場が設立される。スメタナは、ドイツ色の強いプラハを出て、チェコ色の強いプラハに帰ってきたのだつた。もちろん偶然帰ってきたのではなく、プラハの変貌を見ての帰郷だつた。

民族主義の先頭に立つ音楽家として、スメタナは迎ええられるはずだつた。ところがことはうまく運ばない。新しくできた仮の劇場の楽長にはなれなかつた。むしろ劇場の監督と対立したくらい。オペラ「売られた花嫁」の上演

ことはできなかった。

とどめは精神錯乱である。プラハがスメタナの生誕六〇年を祝つたとき、本人はもう何もわからない状態になっていた。スメタナが死んだのは精神病院で、狂気の発作の末の死だつた。

チェコの音楽を切り開いた人物は、ドイツ語で教育を受けた。ドイツ語は名人だつたが、チェコ語は少々弱かつた。国民的オペラを書こうと活動を始めたとき、まずチェコ語をしっかりと学ばなければならなかつたほどだ。

スメタナの生きた時代のボヘミアは、オーストリアの支配下にあつた。だがそれで安定していたのではなく、大きくゆれ動いていた。

スメタナがトゥーン伯爵家の家庭教師を辞め、音楽家として自立しようとして四苦八苦していた一八四八年は、ヨーロッパの革命の季節だつた。フランスの二月革命に始まり、六月にはプラハでも革命が起り、失敗した。スメタナはこのときから、ナシヨナリストとしての意識を強く持つようになる。

音楽学校を開いて成功したのだ

が、スメタナの国民作曲家としての評価を高めるが、続く「ダリボル」は、ワグナー的、ドイツ的だという批判を浴びた。

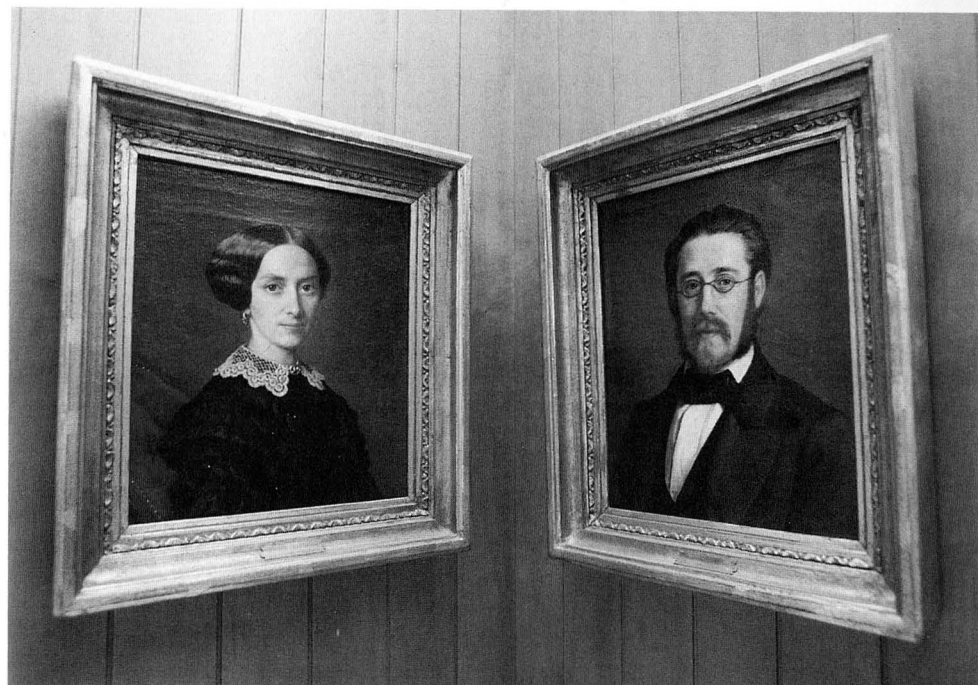
批判がまったく的はずれだつたわけではない。スメタナの音楽的な基盤は、確かにドイツに根ざしていた。若いころ、プラハを訪れたリストの演奏に感動したスメタナは、ワグナーの語法に接近、リスト自身とも親しく接していた。

とはいえ、スメタナが目ざしたのはやはり独自のチェコ国民音楽だつた。しかしそれは新しい音楽の潮流に沿つた、芸術音楽でなければならぬと考へた。だが、チェコの国民音楽は、民謡の上にこそ築かれるべきだと主張する勢力が強かつたのだ。「売られた花嫁」以後のスメタナは、そちらの一派にとつては裏切り者だつたのだ。今日でははつきりとスメタナの正しさが証明されている。しかしそれがプラハの人々の主流の意見になるのは、本人が晩年を迎えたころだつた。

チェコの国民的な音楽を樹立しようとしたスメタナが、オペラを



▲スメタナの父母の画像(右頁ともにスメタナ博物館蔵)



▲スメタナ夫妻の画像

その作品の主軸にすえたのは、当然だったろう。言葉と結びついたオペラとそして標題音楽こそ、民族意識の表現にふさわしい。しかも時代は、ドイツにワーグナー、イタリアにヴェルディが出現し、音楽と言葉との結合が謳われていた。

スメタナの代表作として、いまでも世界中で上演されている「売られた花嫁」は、民謡を多く取り入れた、徹頭徹尾チェコ的であったため、初演されたときから大人気を博していた。専門家の批判はあつたけれど、結局は成功を収めた。愛国的な内容の「ダリボル」や、祝典として上演するために書かれた、チェコ建国の女神を主人公とした「リブシエ」は、スメタナの力作というべきだろう。結局は受け入れられたものの、「ダリボル」は初演でつまづいてしまったし、「リブシエ」に至っては、初演の機会すらなかなか与えられなかった。「ダリボル」も「リブシエ」も含め「売られた花嫁」以外の七つのオペラ（そのほかに未完の「ヴィオラ」があるか）は、今日チェコ以外の国ではほとんど上演されない。

い。愛国の限界ということか。民謡を基本にした「売られた花嫁」のようなオペラこそ……と考えた人たちの意見も、一理あつたのかもしれない。

「売られた花嫁」の成功で、国民劇場の指揮者となり、反対派と争いつつも、精力的に活動していたスメタナだが、幻聴が始まり、耳の病いが悪化して、引退を余儀なくされた。一八七四年、スメタナはプラハを去り、ヤブケニツェ村の娘婿の家に移った。聴力を失ない、仕事を失なつた音楽家は、しかしここで旺盛な創作力を発揮した。「モルダウ」「ブルタヴァ」を第二曲とする連作交響詩「わが祖国」が書き進められた。そして弦楽四重奏曲「わが生涯より」をはじめとする室内楽曲も作られる。

オペラは無理かとも思われたが、スメタナにはまだ十分な力があつた。「口づけ」「秘密」「悪魔の壁」はこの時期になつて作曲されたオペラである。

一八八二年、「売られた花嫁」の千回目の上演が行なわれ、「わが祖国」の初演があつた。このあたり



▶プラハのスメタナゆかりの金の一角獣の家

から、スメタナの栄光が始まった。しかし残されている年月はごくわずかだった。

スメタナは、謙虚な性格だったが、人によつては変わり者と見られた。病弱だったにもかかわらず、恋愛においては情熱的で、音楽に對してはいつも真剣そのものだったという。聴力を失なつたが、目はもともと近眼で、度の強い眼鏡を離さなかつた。

アン・アン・ド・ヴォルジャーク

ドヴォルザークか、ドヴォルジヤークか、ドヴォルジャックか、ドヴォジャークか？

チェコ語読みに近いカタカナだとドヴォジャークらしい。ここではいま一般的なドヴォルジャークということにしよう。立派な人物だったから、多少の読み違いは大目に見てくれるだろう。

ドヴォルジャークは一八四一年に生まれ、一九〇四年に亡くなった。

生まれたのはブルタヴァ川に沿つたボヘミアの村ナホセヴェスで、プラハからおおよそ三〇キロほどのところにある。

いまはもちろんチェコスロヴァキアだが、生まれたときは（そして死んだときも）村はミュールハウゼンという名だった。

肉屋と旅館という、日本ではあまり考えられないとり合わせを生涯にする家に、ドヴォルジャークは生まれた。長男だったので商売を継ぐことになるはずだった。肉屋になるための修業をして、肉屋

の組合から免状をもらったのだが、音楽の才能を見つける人たちのおかげで、肉屋にはならずじまい。

生家はいま記念館となつていて、すぐ近くに鉄道の線路が走り、駅がある。この鉄道が敷かれたのはドヴォルジャークが八歳のときだった。村の学校の先生がオルガン教師で、音楽の基礎を学び始めたのと同じところである。音楽も熱心に学んだが、夢中になつたのは汽車の方だった。線路をゆく汽車の雄姿を、胸をときめかせて眺めた。

音楽と一生つき合うが、鉄道好きも続いた。プラハでは毎朝駅まで散歩し、出発する列車、到着する列車を見ていた。もちろん機関車の型や番号を熟知していたし、時刻表にもくわしかつた。

アメリカへ行くのを決意したのも、アメリカの列車や駅を見られるからではなかつたかと思われるふしがある。



▶ドヴォルジャークの胸像（ドヴォルジヤークの生家で）

く、汽船にも関心を持ち、駅と同じくらい、港にも通つた。

ドヴォルジャークの生きた一九世紀後半は、工業化が著しく進んだ時代だった。そして当時のボヘミアは、ハプスブルクの帝国内で工業化の先端に立つところだった。ボヘミアの野に及んだ時代の先端と最初に接触して以来ドヴォルジヤークは、現代の少年たちが先端技術をゲームやパソコンから切り取つているように、鉄道として切り取つたのである。

▶ボヘミアはとても音楽の盛んなところで、ドヴォルジャークは少年のころから楽器を演奏し、音楽

に親しんだ。得意だったのはヴァイオリンで、村中で評判になった。プラハのオルガン学校に入ったのは十六歳のときだった。それ以来このボヘミアの首都と深く結びつけられることになる。

何しろそのころのプラハは、ドイツ圏の音楽の中心の一つだった。さまざまな音楽家たちがやってきて、コンサートを開いていた。ベリオリオズにリストにワーグナーという具合。刺激的な都市から刺激を受けた。

ドヴォルジャークは貧しく、コンサートを聴く費用など全然なかったが、なんとかもぐり込んで、いろいろ聴いた。

オルガン学校を卒業してからは、ヴィオラ奏者となり、はじめは小さなオーケストラで弾き、やがてのちに国民劇場となる仮の劇場のオーケストラのヴィオラ奏者となった。

ここで数多くのオペラ上演に加わり、音楽的な財産を蓄積した。蓄積するだけでなく、表現にもかった。

まだ劇場のオーケストラに属する前から、ドヴォルジャークの作

曲は始められていた。そのころの多くの作品は、自分自身で破棄しているが「オーケストラのためのホルカとギャロップ」などいくつかが残されている。

作品一となったのは一八六一年の弦楽五重奏曲だが、それから室内楽がつぎつぎと作られた。やがて交響曲、オペラと拡大してゆく。

先輩スメタナと知り合ったのは、劇場のヴィオラ奏者を務めていたとき。ドイツ的な基盤の上に立つスメタナと、ドイツ語があまり上手にならず、ボヘミアの地に深く根ざしたドヴォルジャークが、チエコの国民的音楽を作り上げてゆく。

劇場をやめ、教会のオルガン奏者となって作曲に励んだが、どうしても収入は減ることになる。結婚したドヴォルジャークは、とても豊かな暮らしをするわけにはいかなかった。

だが、貧乏作曲家に幸運が訪れる。オーストリアの政府による奨学金が与えられることになった。審査したのはエドゥアルド・ハンズリック、ヨハン・ヘルベック、そしてヨハネス・ブラームスで、

三人はドヴォルジャークの才能に驚いたのだった。

とりわけブラームスは、積極的に若く才能ある音楽家を支援した。交響曲もオペラも作り、作曲家としての名声を築いたころ、ウィーンに出てドイツ語によるオペラを作るよう誘われた。望み通りの国際的名声が得られるはずだった。しかしこの誘いを断わる。

ドヴォルジャークはボヘミアの作曲家だった。

◆
ドヴォルジャークは交響曲等器楽の作曲家か、それともオペラの作曲家か？

現在では明らかに前者というところになっている。しかし、当時の風潮を考えると、これは異例であつた。東ヨーロッパの国民楽派の作曲家たちは、オペラ、あるいは標題音楽に傾斜していたからだ。

オーストリアの支配下にあつて、チエコのナシヨナリズムは十九世紀の後半、ますます高まっていた。ボヘミア王を兼ねる皇帝は、二重帝国を作つてハンガリーの地位を、少くとも名目上対等なものにしたが、チエコはそうではなかった。

圧力は緩められていたが、ナシヨナリズムは衰えるどころではなかった。

このナシヨナリズムが、芸術のナシヨナリズムと結びついていた。スメタナは、民族的オペラを望まれ、それに応えたが、ワーグナー的であり過ぎるという批判を、絶えず受けなければならなかった。

ナシヨナリズムの表現は、音楽ならオペラか標題音楽が最もふさわしい。

決して民族意識が乏しかったわけではないドヴォルジャークだが、成果を挙げたのは、純音楽だった。とはいえ、ドヴォルジャークは多くのオペラを手がけている。今日では「ルサルカ」が知られているくらいだが、「悪魔とカーチャ」「デイミートリー」などが書かれている。

十年以上もオペラの劇場で演奏し、当時大騒ぎされたワーグナーにも大変くわしかったドヴォルジャークは、実は立派なオペラ作曲家だった。オペラに手をそめなかったブラームスとは違う。

「ルサルカ」はもちろん、その他のオペラもあなどれない。これか

ら上演される機会が多くなる可能性は十分にある。

それでも、交響曲や室内楽の作曲家というレッテルは、はがされることはなさそうだ。

ドヴォルジャークが、活動的なナシヨナリストではなく、ナシヨナリズムを作品で表現しようとする野心を持つタイプではなかったからだろう。祖国への愛情は、別の姿で現われるのである。

◆
ウィーンで認められ、さらにイギリスでも認められたドヴォルジャークを、アメリカが招いた。

破格の条件を得て、ドヴォルジャークはアメリカにおもむいた。ニューヨークのナシヨナル音楽院の院長に就任し、作曲家、指揮者、そして教育家として、およそ二年間をアメリカで過ごした。

アメリカはとても居心地が良かった。汽車や汽船はあるし、コンサートでも成功を収め、アメリカでの名声も生まれた。アメリカの黒人特有の音楽やアメリカ・インディアンに接することもできた。

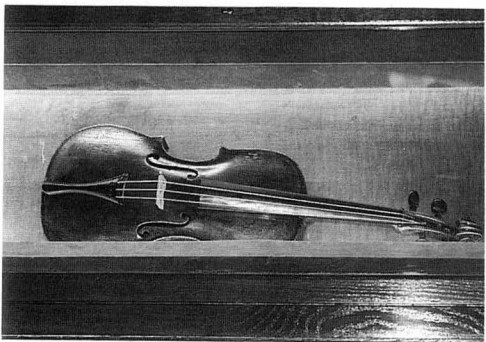
それでもドヴォルジャークは、

故郷への想いをつのらせる。交響曲「新世界から」に、その想いを聴きとらないわけにはいかない。ともかく「新世界から」のほか、弦楽四重奏曲「アメリカ」など、今日ドヴォルジャークの代表作として広く親しまれている作品を書いて、ドヴォルジャークはプラハに戻った。

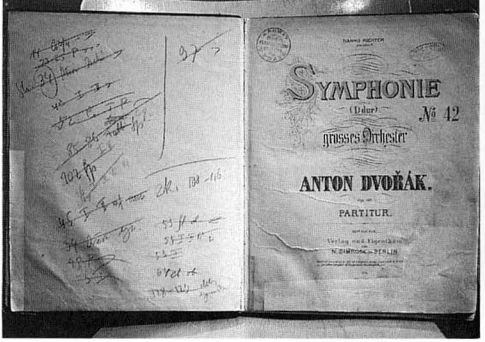
◆
晩年のドヴォルジャークは栄光に輝いていた。スメタナのあとを受けて、チエコの国民音楽を完成に導き、その声価を世界中に示した大作曲家として、尊敬を集めた。すでにオーストリアから勲章を得ていたが、一九〇一年にはオーストリアの終身上院議員として貴族に列せられている。同じ年にはプラハ音楽院の院長に就任した。六〇歳の誕生日は、国を挙げてのお祝いになった。

グスタフ・マラーはドヴォルジャークの支持者となり、ウィーンでその作品を演奏した。アルトウーロ・トスカニーニはミラノで……。

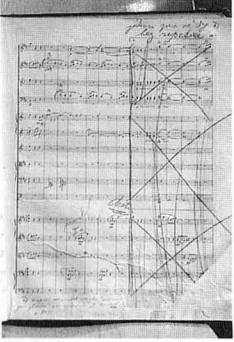
最後の作品となったオペラ「アルミダ」の初演に、身体を悪くし



◆
ドヴォルジャークの奏いたヴィオラ
(ドヴォルジャーク博物館)



◆
ドヴォルジャーク愛用のスコア。
交響曲第6番作品60 (ドヴォルジャーク・ホール)



◆
ドヴォルジャーク自らがカットした右のスコアの一部。

たドヴォルジャークは出席できなかった。しかし失敗に終り、現代でも評価の高い作品だったから、それでよかったのかもしれない。

一九〇四年の五月、ドヴォルジャークはプラハで死去した。プラハだけでなく、世界中の音楽愛好家が悲しんだ。

◆ プラハに住んだドヴォルジャークだが、もともとボヘミアの自然

レオシュ・ヤナーチェク

ヤナーチェクの町はプラハではない。ブルノである。

チェコスロヴァキアはチェコ(ボヘミア)、モラヴィア、スロヴァキアの三つの「国」から成っているが、ヤナーチェクはモラヴィアの人だった。

レオシュ・ヤナーチェクは、一八五四年にモラヴィアのフクヴァルデイで生まれ、一九二八年、オストラヴァで亡くなっている。一生の大部分を過ごしたのはモラヴィアの首都ブルノだった。

ボヘミアで生まれたマーラーよ

れだけ個性的だったと考えることもできそう。確かにヤナーチェクの音楽語法は独得で、音楽の歴史から少々離れたところに立っている。

ブルノで、ヤナーチェクは音楽学校を設立してそこで教え、音楽雑誌を作って評論を書いた。つまりブルノの音楽界の中心人物だった。

とはいえブルノは大都市ではなかった。いや、いまでも、チェコスロヴァキア第二の都市とはいえ、第一の都市プラハとは比較にならない。田舎町と呼ぶには大き過ぎるが、文化的に豊かなところというわけではない。

ヤナーチェクに、他所にゆく機会がなかったわけでもない。ワルシャワから招かれたこともある。壮年時代、プラハでの成功を望んだが、もし「イエス・フア」が上演され、成功していたら、どうなっていたかわからない。しかし長いあいだヤナーチェクはブルノにいて、その独自性を育くんだ。かなり歳を重ねてから、プラハやウィーンでの成功があったが、そのころにはヤナーチェクの音楽も人

に囲まれているのが性に合っている人だった。イギリス訪問で成功を勝ち得た一八八四年、それまでもたびたび訪れていたヴィンカーに地所を買い、別荘を作った。毎年春から秋、つまり冬を除く一年中みたいなのだが、この別荘で暮らすのが常だった。

◆ 確かにヴィンカーは緑の多い、いかにもボヘミアらしいのどかな場所だ。もともとカウニッツ伯爵の領地で、いまでもその館が建っている。

り六歳年上。現代の音楽界で、ヤナーチェクは相当の場所を占めているけれど、マーラーのように華やかな作曲家ではない。

もしかしたら、それがヤナーチェクにはふさわしいのかもしれない。

子供のころから音楽的才能を発揮したヤナーチェクは、プラハのオルガン学校で学び、さらにライプツィヒ、ウィーンにも、学ぶためにおもむいた。しかし学ぶことはないと判断した。それだけ優秀だったとみることもできるが、そ

生も、すでに決っていた。

ブルノにはヤナーチェクが一九一〇年から住んだ家が残り、記念館になっている。劇場にはヤナーチェクの名が冠せられている。墓地にシンプルな墓がある。音楽好きにとって、ブルノはヤナーチェクの町である。

◆ バルトークに先んじて、ヤナーチェクは民族的な音楽素材に注目し、それを生かした。つまりモラヴィアの民俗的な音楽の要素である。バルトークほど深入りはしなかったものの、ヤナーチェク作品には、モラヴィアの民俗的な音楽性が随所に顔を出す。

しかしヤナーチェクはただ地方的な作曲家ではなかった。複雑な、しかし耳にはやさしい(易しくも優しくもある)響きとリズム、そして伝統から離れ、モチーフを独得なやり方で組合せる方法は、民俗性よりもヤナーチェクという作曲家の個性に属している。

プラハで学んだ折、ドヴォルジャークと知り合い、歳の離れた友人として親しくつき合ったが、音楽的にはむしろロシアのムソルグ

る。森の奥には小さな泉がある。ドヴォルジャークは、ここで水の精「ルサルカ」の想を練ったという。

◆ プラハには立派なドヴォルジャーク記念館がある。街のまん中なのに、美しい庭園がある。十八世紀の初めに建てられた館は、実はドヴォルジャークと縁があるわけではないのだが、一九三二年から、遺品等を集め、記念館として公開されている。



▲ヤナーチェクの胸像(ヤナーチェク記念館)



スキーとの近さを指摘されている。何よりヤナーチェクの音楽を特徴づけるのは、その文学性と主観性の強さだろう。人の「語り方」に関心を持ち、研究したヤナーチェクは、声と言葉とを重視する作曲家だった。

◆ さらに人間の心理への関心も、作品に強く表われている。

当然ヤナーチェクの作品の中心を占めるのはオペラである。世界中で高い評価を得るようになったのは、実はごく最近なのだけれど、

いくつもの作品が現役である点では、ヤナーチェクはスメタナをしのぎ、チェコスロヴァキア最大のオペラ作家である。

代表作と見なされているのは「イエス・マリア」で、これはヤナーチェクの生前すでにウィーンをはじめ各地で上演され、ポピュラーな演目になっていた。ブルノ出身で、リヒャルト・シュトラウスのオペラで活躍した大ソプラノ、マリヤ・イェリツァが、イエス・マリアを各地で歌ったのが、人気を博した理由の一つだろう。

名声を得るようになってから、ヤナーチェクは力を発揮し、多くの作品を書いた。人の表現を重視し、言葉を重視したヤナーチェクが、自分自身で台本を書き、作曲した四つのオペラは、いずれも二〇世紀におけるとりわけ重要な舞台芸術となっている。「カーチャ・カヴァノヴァ」「利口な女狐の物語」「マクロブローロス事件」だ。

ときには陰惨な、そして心理的要素の強いオペラで、万人向けでないのは確かだが、精緻で特別な魅力を持った作品なのも確か。成功を取めるようになってから

のヤナーチェクは、器楽曲も手がけるようになったが、弦楽四重奏曲第一番はトルストイの「クローイツェル・ソナタ」からインスピレーションを得て作られているし、第二番は「内緒の手紙」と呼ばれるように、自分自身を語ったもので、やはり文学的要素の強いものが多い。

オペラで、そして器楽曲でも、ヤナーチェクの音楽はどこか官能的な響きを宿している。本人にそういうエネルギーが強かったからだろうか。

ヤナーチェクは二七歳のとき、短くない恋愛の末、まだ十六歳に満たないズデンカと結婚した。この結婚生活はヤナーチェクの死まで続く。だが六三歳のとき、カミラ・シュテスロヴァーという、自分より三八歳若い人妻に、激しい恋心を抱く。この関係も死ぬまで続いた。

「消えた男の日記」「カーチャ・カヴァノヴァ」「利口な女狐の物語」「マクロブローロス事件」そして弦楽四重奏曲「内緒の手紙」は、カミラへの愛情の影響下に作られて

いる。

一九二八年、ヤナーチェクはカミラとその息子を自分の故郷にともなう。(実はその夫も一緒だったが、用事があって途中で帰ったのである)このときに風邪をひき、肺炎になって、それがもとでヤナ

ーチェクは死去した。

妻ズデンカとカミラとの対立は、ヤナーチェクの死後まで持ち越されたらしい。

ヤナーチェクの作品は、チェコ、そしてドイツ圏では、第二次大戦

グスタフ・マーラー

一八六〇年、グスタフ・マーラーが生まれたのは、プラハとウィーンとのあいだにある小さな村カリシュトだった。

だが両親はともにドイツ系ユダヤ人で、チェコ人ではなかった。

生まれて半年もしないうち、引越したが、生地とはさほど離れていない、やはりボヘミアのイグラーウという町に移っている。銀の産地として知られる地方の中心地である。

ここでマーラーの音楽的才能が芽ばえた。父親から買ってもらったアコーディオンを巧みに弾いて評判になったのは四歳のとき、自分からピアノを弾くようになったのは六歳のときだった。公開の場でピアノを弾いたのは十歳。



十五歳でウィーンに出て学び、やがて活動の場を世界に広げたマーラーは、チェコスロヴァキアの音楽家ではない。生まれ故郷で、

前に評価を得るようになっていたが、世界的に広まったのは戦後である。マーラーのようにはならないにせよ、これからも多くの支持者を獲得してゆくことだろう。



◀ 若き日と晩年のヤナーチェク夫妻



▶▶ マーラーの像と生家の外観

楽を養ったのは確かにボヘミアだった。

家の近くに軍隊の駐屯地があり、そこから聞こえるラッパの音や行進曲が、マラーの交響曲の中に

ボスワラフ・マルティヌー

ヤナーチェクに続いて、世界的な評価を得るようになったのがマルティヌーだ。一八九〇年、ボヘミアの高原の町ボリチユカに生まれ、一九五九年スイスのリースタールで死去している。

プラハの音楽院でヴァイオリンを学んだマルティヌーは、一九一三年にチェコ・フィルハーモニー管弦楽団に入団し、一〇年間その団員だった。はじめは独学で作曲をしていたが、プラハでヨーゼフ・スーク（ドヴォジャークの弟子で娘婿、作曲家・ヴァイオリニスト）に学び、一九二三年からはパリでアルベール・ルッセルに師事した。一九二八年に弦楽四重奏曲が音楽祭のコンクールに入選して以来、作曲家としての活動を始めた。

オーストリアの支配下で生きた

現われるというのは、よく知られている。だがそれだけでなく、マラーの音楽全体に、ボヘミアから吸収したさまざまな養分がしみ込んでいる。

スメタナやドヴォルジャークより、独立したチェコスロヴァキアに生きていたマルティヌーのほうが、ずっとひどい目に会った。パリにいたあいだにナチがその力を拡大し、アメリカに渡ることになった。そしてチェコに戻ることはなかった。

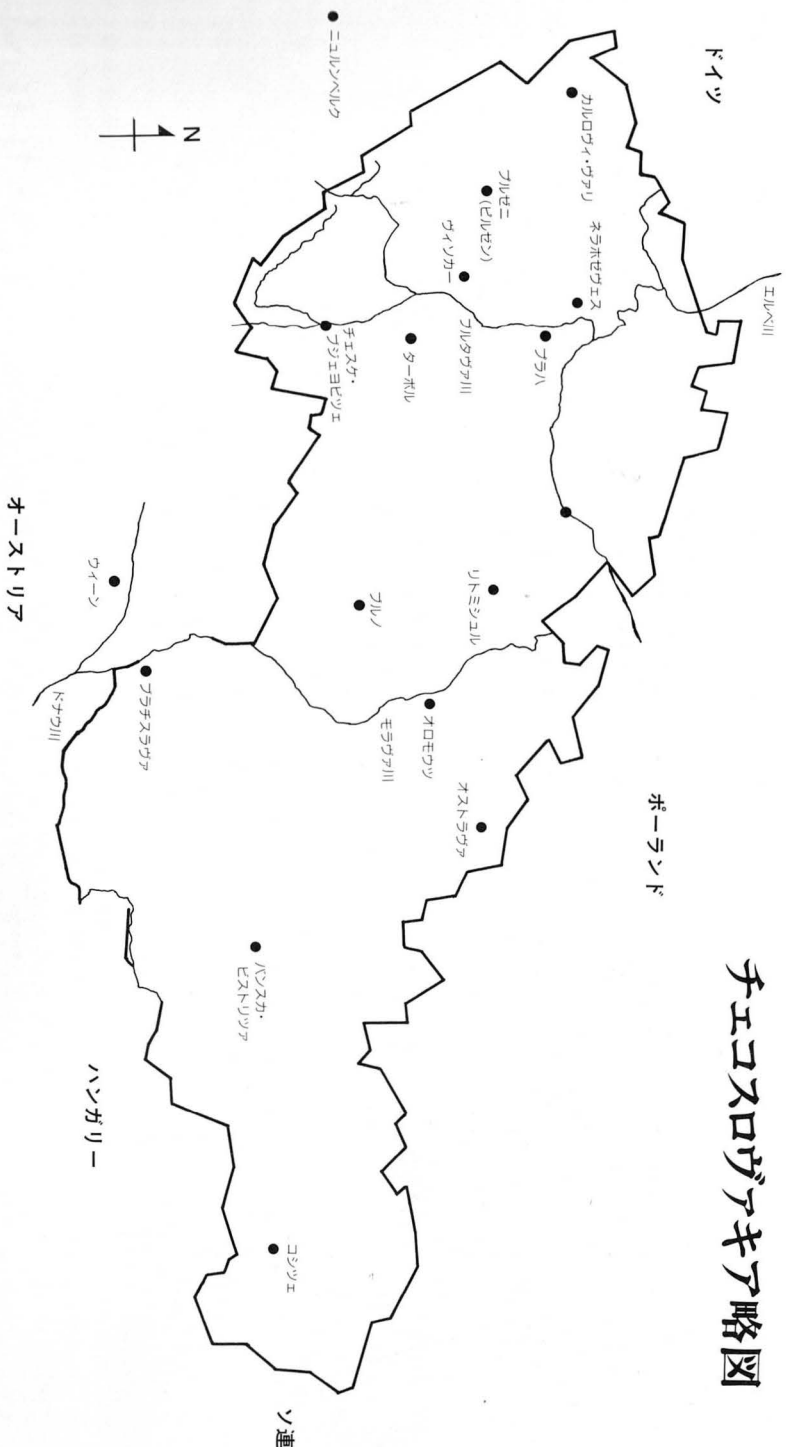
十を越えるオペラ、四つの交響曲など、多作家だったマルティヌーは、今世紀の作曲家にしては多くの作品を残している。前衛的ではなく、どちらかといえば伝統に沿った作風だが、故郷ボヘミアの音楽的要素が入ってきたり、ジャズを取り入れられたり、さまざまな面を持っている。チェコでの人気は高いし、日本も含む世界の音楽界で、マルティヌーの作品が演奏される機会は、次第に増えている。

名を成してから、マラーはたびたびプラハを訪れている。交響曲第七番はプラハで初演された。プラハ・ドイツ劇場、現在のスメタナ劇場でも指揮している。



▶ピアノを弾くマルティヌー（A・ホーフマイスター画）。立っているのはマルティヌーのジャズ・オペラ「ナイフの涙」の台本作家リブモンッドセーニユ。
「音楽家409人の肖像画」全5巻 音楽之友社刊より

チェコスロヴァキア略図



チェコスロヴァキアの音楽家たち

アンチエル(カレル)1908—73



指揮者。チェコ・フィルを指揮しスメタナ、ドヴォルジャーク、ヤナーチェクなどに忘れがたい名演を残している。

ヴラフ四重奏団 1946結成
スメタナ、ヤナーチェクと並ぶチェコスロヴァキア三大弦楽四重奏団のひとつ。ハイドンやドヴォルジャークを得意とした。
クーベリック(ヤン)1880—1940
19世紀末から今世紀にかけて活躍した世界的名ヴァイオリニスト。

指揮者ラファエルは彼の息子である。

クーベリック(ラファエル)1914—
バイエルン放送交響楽団との数多くの名盤で知られる指揮者。特にマーラー、ドヴォルジャークが十八番。
グルペローヴァ(エディタ)1946—



現代最高のコロラトゥーラ・ソプラノ。オペラはもちろん、宗教曲、歌曲までそのすべてが必聴と言えるほど。
コシユラー(ズデニェク)1928—
東京都響にしばしば客演 多くの

名演でもおなじみの指揮者。モーツァルトから現代曲まで誠実に演奏を聴かせる。

コンヴィチユニー(フランツ)1901—1962
名指揮者。ライプツィヒ・ゲヴァントハウスの楽長としてドイツ・ロマン派の演奏で高い評価を得ていた。
サードロ(ミロシュ)1912—
チェコ・トリオ、スーク・トリオなどで主に室内楽で活躍。チェコ・フィルのソリストも務める。
シュターミッツ(ヤン)1717—57
作曲家、指揮者。マンハイム楽派の中心人物としてハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどに影響を与えた。
スーク(ヨゼフ)1874—1935
作曲家、ヴァイオリニスト。「弦楽のためのセレナード」などが有名。同名のヴァイオリニストは孫にあたる。

スーク(ヨゼフ)1929—



ヴァイオリニスト。独奏のほかパネンカ、サードロと組んでスーク・トリオを結成、室内楽にも力を注いでいる。
スメタナ(ベドルジフ)1824—84
歌劇「売られた花嫁」でチェコ国民楽派を創設した大作曲家。ほかに交響詩集「わが祖国」弦楽四重奏曲「わが生涯」など。

スメタナ四重奏団 1943結成



© KLAUS HENNCH

チェコを代表する弦楽四重奏団。スメタナの「わが生涯」をすべて暗譜で演奏したことも有名。1988年に解散。
ゼレンカ(ヤン・デイスマス)1679—1745
後期バロック期の作曲家。ドレスデンで長く活躍、カール六世のプラハでの戴冠のためにオペラを作曲した。
タリリヒ(ヴァーツラフ)1883—1961
チェコ・フィル育ての親とも仰が



れる名指揮者。ヘブラハの春の創立にも尽力した。チェコ音楽の解釈には定評があった。
ドヴォルジャーク(アントニン)1841—1904
チェコ国民楽派を代表する大作曲家。管弦楽から室内楽、オペラに至る広いジャンルに多くの傑作を残した。
ドヴォルスキー(ペテル)1952—
テノール歌手。世界のオペラ・ハウスで広範なレパートリーをこなす。宗教曲でもその名唱は光っている。
ノイマン(ヴァーツラフ)1920—

現代チェコを代表する指揮者。チェコ音楽はもちろん、マーラーなどでも堅実な演奏を聴かせてくれる。
ノヴァーク(ヴィーチェスラフ)1870—1949
作曲家。ブラハ音楽院でドヴォルジャークに学ぶ。印象主義的な作風で代表作に交響詩「永遠とあこがれ」など。
パネンカ(ヤン)1922—
ピアノリスト。スーク・トリオ創立時からのメンバーで、特に室内楽で多くの成果を聴かせてくれる。
プシホダ(ヴァーシヤ)1900—60

ヴァイオリニスト。多彩なテクニクと華麗な音色で、パガニーニなど技巧的な曲でその真価を発揮した。
ポツプ(ルチア)1939—
名ソプラノ歌手。恵まれた容姿と愛らしく美しい声で60—70年代のオペラ・ハウスを席巻する。後にオーストリアに移住。
マルティヌー(ボフスラフ)1890—1959
チェコ近代の大作曲家。主に管弦楽、室内楽、ピアノ曲で名作を遺す。

近年とみにその評価が高まっている。
ヤナーチェク(レオシュ)1854—1928
チェコスロヴァキア西部のモラヴィア地方を代表する大作曲家。オペラや室内楽に多くの傑作を生み出した。
ヤナーチェク四重奏団 1947結成
スメタナ、ヴラフと並ぶチェコスロヴァキアを代表する弦楽四重奏団。特に名を冠したヤナーチェクの演奏は素晴らしい。
ルージイチコヴァ(スザナ)1928—



チェコ第一流のハープシコード奏者。バッハとヘンデルを主要レパートリーにして、堅実な演奏をする。